

041217 M1 学識者インタビュー/東工大・藤岡 洋保先生 at 東工大藤岡研究室

インタビュアー:中村 政人 アシスタント:福田 啓作

中村 (以下、N) :まず、Docomomo とはどのような活動をされている組織なのでしょうか。藤岡先生 (以下、F) 設立の経緯からお話しした方がいいかと思います。Docomomo は 1988 年にオランダで創立された団体です、当時アイントホーヘン工科大学の教授をしておられた、フーベルト・ヤン・ヘンケット先生 (現・デルフト工科大学教授) が 20 世紀の建築にも歴史的な価値があるのではないかという提唱をされまして、それに賛同して集まった西ヨーロッパの研究者や建築家を中心に結成されました。名前がわかりにくいのですが、Docomomo というのは、”Documentation and Conservation of buildings, sites, and neighborhoods of the Modern Movemen”t の略語で、日本語にすると「モダン・ムーブメントに関わる建物と環境形成の記録調査及び保存のための組織」という、いささかわかりにくい名前になってしまうんですけども、要するにモダン・ムーブメント、つまり近代運動に関わる建物や技術や、あるいは環境、環境というのはニュータウンのようなものも含むという意味ですが、そういうものに歴史的な価値を認めて、リストアップしながらそれらの保存を訴える組織ということです。それから、そういうことに関していろいろな資料があるわけですね。それは図面や書類、写真などですが、そういう情報を集めてリストアップしていくことも重要な仕事になります。西ヨーロッパではじまったんですが、それを東ヨーロッパ、それからヨーロッパ以外の地域にもひろげて、グローバルな組織にしたいということで、日本にも 90 年代はじめに打診があったと聞いています。そのとき日本側の窓口になった方は何のアクションも起こされなかったようです。Docomomo は 2 年に 1 回総会を開くのですが、2000 年のブラジリア総会にあわせて、それぞれの国 (支部のことで、Docomomo では「ワーキング・パーティー」と呼びます) に現存している近代建築の好例 20 件を選定してそれを集めた本をつくるというプロジェクトが実施されました。それに関連して、まだ加盟していなかった日本にも協力してほしいという依頼が、たしか 1998 年の秋だったと記憶しますが、東大の鈴木博之先生と私のところに来ました。これはいいことだから積極的に協力しようということになったのですが、その当時日本はまだワーキング・パーティーになっていなくて、しかもワーキング・パーティーになるためには 2000 年の総会を待たなければならないということで、暫定的に日本建築学会の中にワーキング・グループをつくって、20 件の選定に対応することになりました。それを 2000 年の 3 月にまとめたものが、他の国の 20 選とともに”The modern Movement in Architecture/ Selections from the DOCOMOMO Registers” (edited by Dennis Sharp & Catherine Cook, 101 Publishers, 2000)に収録されています。

しかし、Docomomo の活動は 20 選で終わりということではありません。リストの件数を増やしていくことが Docomomo のひとつの重要な活動ですので、20 選はあくまでもスタートです。Docomomo Japan としては Docomomo Japan 20 選を決めた後の目標を 100 選に

することに決めて、この本がまとまった後に作業を開始しまして、2003年の9月に100選を発表することができました。そのうちの20件は選定済みでしたから、80件をプラスしたということになります。その活動については、年に2回発行される Docomomo の会誌 Docomomo Journal の中で報告しています。日本のこのような活動は Docomomo International (Docomomo の本部のことで、今はパリに置かれています) にとってはとても好ましい動きなので、積極的にとりあげてくれました。

このような選定作業にはクリアしなければならない問題がいくつもあります。まず、選定基準をどうするかということが大問題で、その時に Docomomo International から示されていたのはかなり曖昧な基準でした。「モダン・ムーブメントとは何か」とか、「それに対応する建築はどのようなものか」ということがはっきりとは指示されていませんでした。これはおそらくあまり厳密な規準を設けると、それを適用できる国とできない国が出てくる。たとえば、フランスとかドイツはモダン・ムーブメント発祥の地ですが、日本はそれを受け入れた国なので、同じ基準では選定できないというようなことが起こりえます。結果としては、それぞれのワーキング・パーティーの自主性を尊重することによってこの選定作業が可能になったとっていいと思います。ちなみに、「1件」はひとつの建物でなくてもよくて、ひとつの地域（ニュー・タウンなど）でも、逆にひとつのディテール（革新的なカーテン・ウォールの例など）でもリストアップしていいのです。

しかし、Docomomo Japan としては何らかの基準を設定しないと選定作業そのものがないということで、いろいろ議論したんですが、結局 1) 合理主義を基盤とし、2) 線や面、ヴォリュームという抽象的な要素の組み合わせで美がつくられるという美学に基づき、3) 社会改革に前向きな建築、という 3 点を基準にすることにしました。そして、1920 年から 1970 年までの間に竣工したものから選ぶことにしました。モダン・ムーブメントというのは、1900 年頃にはじまり、合理主義をベースに、科学技術を信頼しながらその成果を建築に反映させようとした動きです。合理主義は理性を全面的に信頼するわけですから、いま目の前にある問題は人間の理性によって解決できるというオプティミスティックな考え方に繋がり、当然、社会を改革しよう（すべきだ）という意欲が強くなります。それが反映した活動、例えば、住宅地開発とか都市計画というものに対しても、できるだけ視野を広げて見ていきたいとわれわれは考えていました。また、合理主義は普遍性を重視するので最新の科学技術を活用することにも前向きです。

選定の対象となる時代の設定についてですが、1920 年は日本最初の近代建築運動といわれる分離派建築会発足の年ですし、一方 70 年代に近代建築に対する懐疑が広がってきたことを念頭に、60 年代まで（大阪万博までとその後で建築の状況が変わったということ）の建築を選ぶことにしたわけです。

ここで注意していただきたいのは、ヨーロッパの最新のモダン・ムーブメントをいかに「正確に」理解し、ヨーロッパの近代建築と同じようなものをいかに「早く」つくったかということの評価の基準にしたのではないということです。もしそれをやりますと、ヨーロッ

パが主流で、日本は亜流という見方になるわけですね。つまり、波紋のようなもので、ヨーロッパを起点にその影響が周辺に広がっていくという歴史観です。もちろん、日本がモダン・ムーブメントを受け入れたのは事実ですが、いかに早く正確にコピーしたかということよりも、それをとり入れることによって日本の建築家はどのような環境や建築をつくったのかということを重視し、この20件、そして後には100件の選定の仕方によってそれを見せたいと考えました。

このような考え方をもとに、まず注意したのは、できるだけ多くのビルディングタイプから選ぶということです。近代の特徴のひとつはビルディングタイプが一举に多様化したことです。工場建築から住宅まで、音楽堂から刑務所に至るまで、多様なビルディングタイプから選定しています。これは、20選においても100選においても同じです。

また、木造も意図的に入れています。といいますのも、少なくとも日本では、「木造＝遅れた技術」ということではなくて、住宅などは、戦後においてもかなり木造でつくられてきたという事実がありますし、その中には、木構造の改良を図ったものや、構造を活用したデザインを模索した動きもありますので、木造にも近代の反映を見ることができると考えました。

それから伝統表現、つまり「日本的なもの」をテーマにした建築も意図的に入れてあります。これはどういうことかといいますと、逆説的に聞こえるかもしれませんが、「伝統」が建築のテーマになったのは近代に特有の現象だということに注目したということです。18世紀後半に国民国家と呼ばれる近代の国家システムがスタートしましたが、国民国家というのは人為的につくられたものである点を認識することが重要です。たとえば国境を決めて、その中にいる人を国民として位置づけたわけです。ところが、往々にして、それは人為的な集団になることが多い。たとえば、フランス革命の後にフランスに共和制の国家（最初の国民国家）ができるわけですが、そこで「フランス国民」と呼ばれることになった人たちの中でフランス語を喋っていたのは全体の46%しかいなかったといわれています。つまり、言語すら共有されていなかったわけです。同じ頃国民国家として形成されたアメリカの「国民」は明らかに人為的な集団ですね。このような集団に「国民」としての一体感を持たせないと国が成り立たないわけですが、それを維持するためには何らかの仕掛けが必要になります。そのひとつが「伝統」、つまりその国の国民が過去や文化を共有していると主張することです。それをベースに、建築においてもほかの国民国家との差異を強調したいという欲求に支えられて、伝統表現がテーマになることがありました。近代の日本では圧倒的に強大な西洋との対比によってアイデンティティーを確立することが重要なテーマになったので、「日本的なもの」とは何かを考察することやそれを建築に表現しようとするのが問題になりました。ということで、伝統表現も日本の近代の重要な様相と見ています。ですから、最初の20選の時から、それに対応するものを選んであります。このような選定方針は、ヨーロッパの人たちに対して「近代」の見直しを提案しているということでもあります。Docomomo Japanは、日本にとって近代とはどのようなものだった

のか、モダン・ムーブメントを受け入れながらそれによって何を表現しようとしてきたというようなことを示すことによって、「近代」の幅の広さを再認識させるとともに、それも含めて「近代」を再定義するべきではないかという提案もしているのです。

先ほど触れましたが、「1件」はひとつのエリアであってもいいということで、20選の時には入れる余裕がなかったのですが、100選の時に日本最初のニュータウンである「千里ニュータウン」を選びました。

このように、Docomomoの枠組みにはかなり自由度があるわけですが、われわれは「技術」にも注目していました。その中で近代特有の技術のひとつということで、プレハブも重視しましたが、20選の時には数が限られたために、そこまで手が回りませんでした。100選の時にはぜひひとつは選びたいということで、何にするかが話題になった時に、われわれの頭には最初からセキスイハイムM1がありました。それが登場したのが1970年ですので、対象とする時代の中にも入るという点でいい例でした。また、プレハブのどこに注目するかという点についてはいろいろ議論があり得ますが、われわれにとっては「プレハブらしい」ことが重要なポイントでした。特に、M1の場合は部屋自体がユニットであるという考え方がベースにあって、それを鉄骨のフレームで構成し、そのほとんどを工場で作ってしまう。つまり、現場での作業量を減らすという意味でも、プレハブの本来の精神にかなったものであるし、それが外観にストレートに表現されている点も評価できると考えました。つまり単に形だけではなくて、システムとしても良くできている。例えば基本ユニットをどういうサイズにするかということは大問題だったと思うのですが、平面寸法でいうと、2,400mm×5,000mmであり、高さが2,700mmという大きさをまず基本のユニットにする。その時に、2,400mmというのは、道路交通法の規制から来ているわけなのである意味では与えられた寸法でしたが、そのユニットを3分割した、一種のサブユニットのようなものを1つの空間単位にするという考え方も評価できると思います。具体的には、2,400mm×1,600mmという大きさが台所や玄関や階段室のユニットになりうるというようなことです。つまり、モジュールをどうやって決めるのか、どこまで標準化し、どういうヴァリエーションを設定するのかというような課題に対して、少なくとも1970年の時点で、良く考えられた提案がなされた。それを評価したということです。

N：その中でも、先程社会改革性といいますか、社会変革性というキーワードをおっしゃっていましたが、M1の場合にはどのような点が挙げられるのでしょうか？

F：これは私個人の考えですが、設計思想やそこに込められた理想が高かった点は評価できるのですが、その理想を貫き通すことはできなかったように思います。それはどういうことかということ、同じような建物が住宅地に並ぶというあり方を消費者があまり歓迎しなかったという点が挙げられます。どうしてそうなったかといいますと、住宅は所有するものだという戦後日本の特殊な状況が反映しているということですね。ご存じかと思いますが、戦前の日本では借家が主流でした。それは夏目漱石などの戦前の小説を読むとよくわかるのですが、みんな気軽に転居していました。それは、借家だったからです。戦前の、1932

年の東京府の調査で、東京市民の 8 割近くが借家に住んでいたことが示されています。ですから、家は借りるものだったんですが、戦災で借家の数が大幅に減ってしまったり、戦時中から敗戦直後に家賃統制をかけたために、借家経営のうまみが無くなって家主が借家業をやめてしまったこと、公共の集合住宅の供給が思うようにできなかったことから、結局、持ち家を暗黙のうちに奨励することが政府の方針になってしまった。そのために、住宅は所有するものになった。所有するものになれば、住み手は好みを反映させようとするわけで、そのために、M1 にあった高い志というか、丈夫な住宅を安く供給するという精神を貫き通せなかったという点は否定できないと思います。しかし、だからといって、M1 がだめだったといっているのではなくて、社会状況がその普及を阻んで、変質せざるを得なくなったんだと思います。私個人の意見としては、M1 が、部屋をユニットにするという方針を守り続けたことは評価していいのではないかと思います。

N：最初の 20 選の際にもプレハブを選定しようという動きがあったとおっしゃっていましたが、その時にポイントとなったのはどのような部分でしょうか？

F：それは「技術」ということですね。つまり、科学技術を積極的に適用することがいい建築をつくることにつながるという近代特有の考え方に関係しています。近代建築に支配的だった考え方です。例えば、吊り構造を使った代々木のオリンピック競技場（1964）のようなデザインは、新しいテクノロジーを使って初めて可能になったものですね。そういうものがある建築であるという考え方があった時代において、プレハブというのも、そういう科学技術の成果を反映させた建築をつくろうというものだったわけです。

N：なるほど。そういう意味では、M1 の場合は鉄骨ユニットの完成度の高さ、といった部分を評価された、ということでしょうか？

F：われわれはそれを評価したということです。それから M1 は姿を変えていかざるをえなかったわけですが、つまり消費者のニーズを汲み取らざるを得なかったということですが、その時に、部屋をユニットでつくっていくとか、鉄骨でそれを構成するという、基本コンセプトは守られています。それは M1 に適用されたのが「筋の良い技術」だったからだとは私は思います。技術には、筋の良いものとそうでないものがある、筋が悪くないと発展性や展開性に乏しいと思うのですが、あんまり複雑すぎてもいけないし、シンプルさとフレキシビリティの匙加減が難しいと思うのですが、M1 の場合は最初に決めたことが、かなり汎用性を持っていたということが何十年もかけて証明されたと思います。

N：積水化学工業では現在、「再築システム」をやっていますし、個人的には M1 のリユースの可能性についても、まだまだあるのではないかと考えています。建築家の大野勝彦氏の始めの思想に「無目的な箱」というものがあり、そこには、ある種の空間概念を環境体として位置付けていく発想があったと思うのですが、その点についてはどのようにお考えでしょうか？

F：「無目的」とおっしゃいましたが、本当はその中にいくつかの前提条件が想定されています。先程も触れましたように、道路交通法による 2,400mm という外からの制約。それか

ら、日本の建物では昔から尺を使っており、300mm ピッチでいろいろな寸法が決まっているという暗黙の前提。それを外すと対応が難しくなるという問題ですね。それから、住宅は完全な無目的な、無性格な空間で成り立っているのではなくて、当然、寝室とか居間ですとか、ある特化した機能に対応するということがありますので、そういうものを暗黙の前提としながら「無目的な」とおっしゃっていると、私は理解します。ですから、その暗黙の前提になっていたものが、汎用性を理解していくうえでの秘訣だと考えています。結局その後 2,400mm というモジュールは変えられたわけですが、基本的には 2,400mm というのは、300mm ピッチの倍数なので、基本的なところで暗黙の前提に対応していたということだと思います。

N : Docomomo に認定されたあとというのは、社会的にどのように評価されていくのでしょうか？

F : これは、まだわからないのですが、Docomomo Japan としては、選定したことを文書にして、建物の持ち主の方、それから設計者の方、施工者の方にお送りしています。セキスイハイムの M1 の場合は持ち主の方というのは非常に難しいので、会社宛にお送りしました。それから大野さんには設計者ということでお送りしました。このような文書送付に対するリアクションについては、いくつかの事例を把握しております。大変喜んでいただけたという例がいくつかありました。これは意外だったのですが、例えば村野藤吾設計の宇部市民館については、宇部市が大変喜んで下さって、市長さん自ら談話を新聞に発表されて、歓迎して下さいました。他には、これは当然予想された反応だったんですが、非常に迷惑であるという反応もありました。

N : 迷惑というのはどういう理由でしょうか？

F : 要するに、こうやって位置づけられてしまうと、壊せなくなるなどの制約を感じる場合があるわけですね。もちろん、われわれは残してほしいという希望を持っていますが、壊すことを止めさせることはできないわけで、100 選には強制力はありません。ほかに、100 選の中に選んだものに、長沢浄水場（1957）という、東京都水道局管轄の建物で、山田守さんが設計したのがあります。ちょうど東京都水道局が修理をしようとした時に Docomomo Japan からの文書が行ったことから、いい加減な修理をしてはいけないと考えていただいたようで、それで設計者の流れを嗣ぐ山田守事務所に修理設計の監督をお願いされたと聞いております。そういう話は、われわれにとってはとても嬉しいことです。

N : 最後に、セキスイハイム M1 が Docomomo に認定されたことに対して、一般の市民の方にどのように理解していただければ良い、とお考えでしょうか？

F : 理解される側にはいろいろな反応があつて良いと思いますし、それをわれわれはコントロールすべきだとは考えていません。むしろ、反応を見ることから、われわれが教えられることもあります。ただ少なくとも、認定してそれを発表するという事は、そういうものに注目してもらつたチャンスをつくつたということで、それをきっかけに、こういうものがあるんだ、文化的・歴史的に価値がある存在なんだということに、まず気づいていただ

くことが重要です。そこから何かが始まることをわれわれは期待しているわけですが、そのような可能性は十分ありうると思います。セキスイハイムにお住まいの方、あるいはご覧になっている方からいろいろな反応はありうると思いますが、ふだん何気なく使っている建物でも、その仕組みや思想に歴史的に評価できる点があるということ、それがプレハブの1つの典型といえるものだったということを理解していただければ、大事にしようとか、あるいはさきほどおっしゃったようにリユースの可能性であるとか、いろいろなことを考えていただけるかもしれない。その出発点といいますか、手掛かりを用意しているとわれわれは思っています。

N：今日はありがとうございました。